

明治中期の小説文体

言文一致

ゲンブナーチ ソクキジクワイ サウリツノ イケン（言文一致速記字会創立意見）

セイヤウデハ ドコデモ コトバト ブンシヤウトガ オウカタ ヒトツデ、ニホンノクニ ノヤウニ、
クチデ イフノト フデデ カクノトガ マルデ マチガウテ キルヤウナ メンダウガ トント ナイ
ソウナガ、ゼンタイ サウナケレバ ナラヌ。ナゼト イフニ、ブンシヤウハ ツマリ コ、ロニ
オモフマ、ヲ クチデ イフカハリニ、フデヲ モツテ ソノトホリ カミニ カキウツス マデノ
コトデ アル。

林甕臣「言文一致速記字会創立意見」『かなのてかがみ』明治21.3



「です」

=話し手の聞き手に対する待遇表現

=対話の世界の敬語

(菊池康人『敬語』1997)

「た」

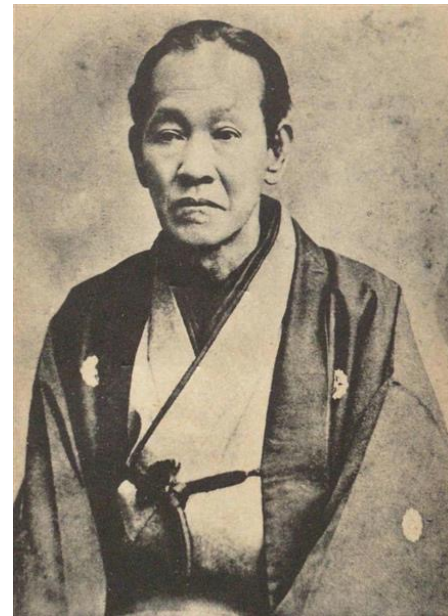
=中立的な言語空間を成立させる三人称
の形態表示

(野口武彦『三人称の発見まで』1994)



「真景累ヶ淵」三遊亭圓朝

- 今日より怪談のお話を申し上げますが、怪談ばなしと申すは近来大きに廃りまして、余り寄席で致す者もございません、と申すものは、幽霊と云うものは無い、全く神経病だと云うことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌いなさる事でございます。それ故に久しく廃って居りましたが、今日になって見ると、却って古めかしい方が、耳新しい様に思われます。これはもとより信じてお聞き遊ばす事ではございませんから、或は流違いの怪談ばなしがよかろうと云うお勧めにつきまして、名題を真景累ヶ淵と申し、下総国羽生村と申す処の、累の後日のお話でございますが、これは幽霊が引続いて出ます、気味のわるいお話でございます。



二葉亭四迷「余が言文一致の由來」

もう何年ばかりになるか知らん、余程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてみよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち礎と膝を打つて、これでいゝ、その儘でいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

自分は少し氣味が悪かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものゝ、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、圓朝ばりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、茲にまだ問題がある。それは「私が……でムいます」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪内先生は敬語のない方がいゝと云ふお説である。自分は不服の點もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

言文一致

ゲンブナーチ ソクキジクワイ サウリツノ イケン (言文一致速記字会創立意見)

セイヤウデハ ドコデモ コトバト ブンシヤウトガ オウカタ ヒトツデ、ニホンノクニ ノヤウニ、
クチデ イフノト フデデ カクノトガ マルデ マチガウテ キルヤウナ メンダウガ トント ナイ
ソウナガ、ゼンタイ サウナケレバ ナラヌ。ナゼト イフニ、ブンシヤウハ ツマリ コ、ロニ
オモフマ、ヲ クチデ イフカハリニ、フデヲ モツテ ソノトホリ カミニ カキウツス マデノ
コトデ アル。

林甕臣「言文一致速記字会創立意見」『かなのてかがみ』明治21.3



「です」

=話し手の聞き手に対する待遇表現

=対話の世界の敬語

(菊池康人『敬語』1997)

母の語り

「た」

=中立的な言語空間を成立させる三人称
の形態表示

(野口武彦『三人称の発見まで』1994)



- 若松賤子 「小公子」『女学雑誌』M23-25
- セドリツクには、誰も云ふて聞かせる人が有ませんかつたから、何も知らないであつたのでした。／おとつさんは、イギリス人だつたと云ふこと丈は、おつかさんに聞いて、知つてゐましたが、おとつさんの没したのは、極く少さいうちでしたから、よく記憶して居ませんで、たゞ大きな人で、眼が浅黄色で、頬髯が長くつて、時々肩へ乗せて坐敷中を連れ廻られたことの面白かつたこと丈しか、ハツキリとは記憶してゐませんかつた。



硯友社

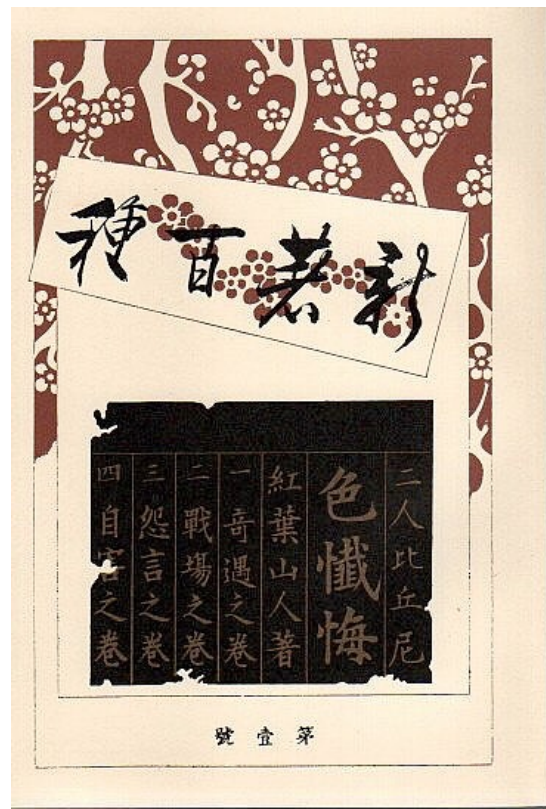


川上眉山・石橋思案・江見水蔭
巖谷小波・広津柳浪・尾崎紅葉・武内桂舟・久我亀石

◎「我楽多文庫」: 手写本8冊(M18.5-19.5)、印刷非売本8冊(M19.11-21.2)、
発売本16冊(M21.5-22.2)、「文庫」と改題11冊(M22.3-22.10)

◎ 筆のすさび→文壇の形成

◎ 泉鏡花・小栗風葉・柳川春葉・徳田秋声

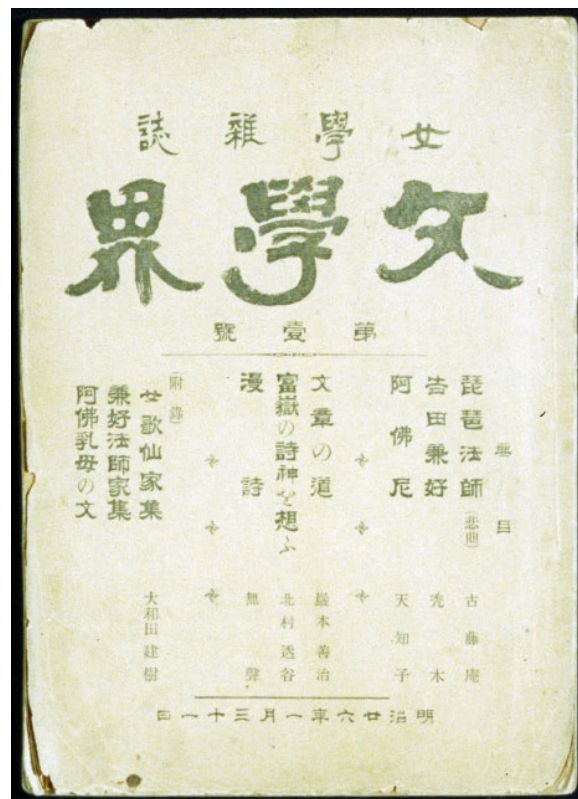
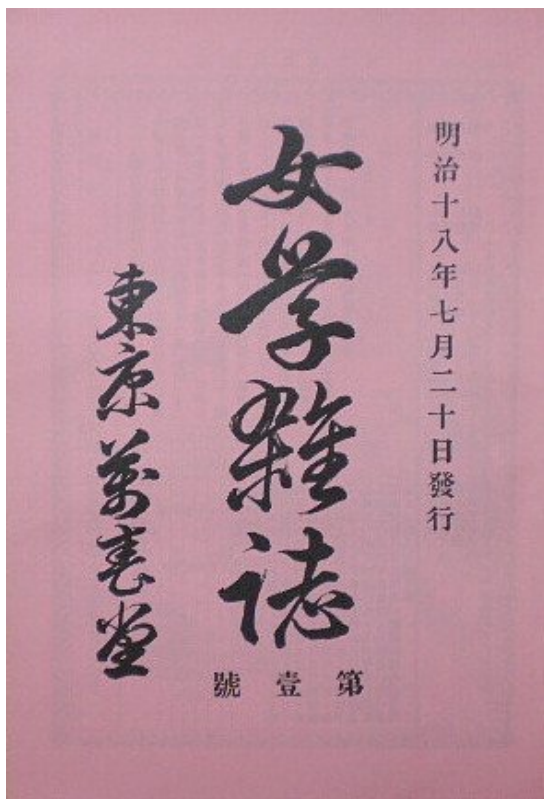


『我楽多文庫』

『二人比丘尼色懺悔』
『新著百種』第一号
吉岡書籍点



『都の花』
金港堂



北村透谷「厭世詩家と女性」

- 恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに尤も多く人世を觀じ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは、抑も如何なる理ぞ。
- 嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ての夢、覺めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ。

(明治二十五年二月)

- ルポルタージュ
- 悲惨小説・深刻小説
- 観念小説



- 家庭小説(明30年代)



- 自然主義(明40年代)



最暗黒の東京



国木田独歩



泉鏡花



泉鏡花「外科室」『文芸倶楽部』明28(1895)年6月号

「どうぞ」と一言答えたる、夫人が蒼白なる両の頬に刷けるがごとき紅を潮しつ。じっと高峰を見詰めたまま、胸に臨めるナイフにも眼を塞がんとはなさざりき。

と見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、さと白衣を染むるとともに、夫人の顔はもとのごとく、いと蒼白くなりけるが、はたせるかな自若として、足の指をも動かさざりき。

ことのここに及べるまで、医学士の挙動脱兎のごとく神速にしていささか間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同はもとよりかの医博士に到るまで、言を挟しはさむべき寸隙とてもなかりしなるが、ここにおいてか、わななくあり、面を蔽うあり、背向になるあり、あるいは首を低るるあり、予のごとき、われを忘れて、ほとんど心臓まで寒くなりぬ。

三秒セコンドにして渠が手術は、ハヤその佳境に進みつつ、メス骨に達すと覚しきとき、

「あ」と深刻なる声を絞りて、二十日以来寝返りさえもえせずと聞きたる、夫人は俄然器械のごとく、その半身を跳ね起きつつ、刀取れる高峰が右手の腕に両手をしかと取り継すがりぬ。

「痛みますか」

「いいえ、あなただから、あなただから」

かく言い懸かけて伯爵夫人は、がっくりと仰向きつつ、凄冷極まりなき最後の眼に、国手をじっと瞻まもりて、

「でも、あなたは、あなたは、私を知りますまい！」

謂うとき晩し、高峰が手にせるメスに片手を添えて、乳の下深く搔き切りぬ。医学士は真蒼になりて戦きつつ、

「忘れません」

その声、その呼吸、その姿、その声、その呼吸、その姿。伯爵夫人はうれしげに、いとあどけなき微笑を含みて高峰の手より手をはなし、ぱったり、枕に伏すとぞ見えし、唇の色変わりたり。

そのときの二人が状さま、あたかも二人の身辺には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきがごとなりし。

二葉亭四迷訳「あひびき」

(『国民之友』明21(1889)年)

- 秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺の林の中に座していたことがあった。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま煖な日かげも射して、まことに気まぐれな空ら合い。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐し気に見える人の眼のごとくに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽に戦いだか、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌りでもなかったが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかな私語の声であった。

国木田独歩「武蔵野」

(『国民之友』明31(1898)年1,2月)

自分も西国に人となって少年の時学生として初めて東京に上ってから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至ったのは近来のことで、それも左の文章がおおいに自分を教えたのである。

(引用)

すなわちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して「あいびき」と題した短編の冒頭にある一節であって、自分がかかる落葉林の趣きを解するに至ったのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は檜の木、植物帯からいうとはなはだ異なっているが落葉林の趣は同じことである。自分はしばしば思った、もし武蔵野の林が檜の類でなく、松か何かであったらきわめて平凡な変化に乏しい色彩いちようなものとなってさまざま珍重するに足らないだろうと。

櫛の類いだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。凧が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。木の葉落ちつくせば、数十里の方域にわたる林が一時に裸体になって、蒼ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くということがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適っているだろう。秋ならば林のうちより起こる音、冬ならば林のかなた遠く響く音。

(略)

自分が一度犬をつれ、近処の林を訪い、切株に腰をかけて書を読んでいると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとに臥ていた犬が耳を立ててきつとそのほうを見つめた。それぎりであった。たぶん栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹もずいぶん多いから。

柄谷行人『日本近代文学の起源』

(1980→『定本柄谷行人集』1,2004)

- 1 風景の発見
- 2 内面の発見
- 3 告白という制度
- 4 病という意味
- 5 児童の発見
- 6 構成力について



岩波書店, 2004



岩波現代文庫, 2008

国木田独歩「忘れ得ぬひとびと」

(『国民之友』明31(1898)年4月)

- そのうち船がある小さな島を右舷に見てその磯から十町とは離れないところを通るので僕は欄に寄り何心なくその島をながめていた。山の根がたのかしここに背の低い松が小杜を作っているばかりで、見たところ畑もなく家らしいものも見えない。しんとしてさびしい磯の退潮の痕が日に輝って、小さな波が水際をもてあそんでいるらしく長い線が白刃のように光っては消えている。無人島でない事はその山よりも高い空で雲雀が啼いているのが微かに聞こえるのでわかる。田畑ある島と知れけりあげ雲雀、これは僕の老父おやじの句であるが、山のむこうには人家があるに相違ないと僕は思った。と見るうち退潮の痕の日に輝っているところに一人の人がいるのが目についた。たしかに男である、また小供でもない。何かしきりに拾っては籠か桶かに入れていているらしい。二三步あるいはしゃがみ、そして何か拾っている。自分はこのさびしい島かげの小さな磯を漁っているこの人をじっとながめていた。船が進むにつれて人影が黒い点のようになってしまった、そのうち磯も山も島全体が霞のかなたに消えてしまった。その後今日が日までほとんど十年の間、僕は何度この島かげの顔も知らないこの人を憶い起こしたろう。これが僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

要するに僕は絶えず人生の問題に苦しんでいながらまた自己将来の大望に圧せられて自分で苦しんでいる不幸せな男である。

そこで僕は今夜のような晩に独り夜ふけて燈に向かっているとこの生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角がぼきり折れてしまって、なんだか人懐しくなって来る。いろいろの古い事や友の上を考えだす。その時油然として僕の心に浮かんで来るのはすなわちこれらの人々である。そうでない、**これらの人々を見た時の周囲の光景の裡に立つこれらの人々**である。われと他と何の相違があるか、みなこれこの生を天の一方地の一角に享うけて悠々たる行路をたどり、相携えて無窮の天に帰る者ではないか、というような感が心の底から起こって来てわれ知らず涙が頬をつたうことがある。その時は実に我もなければ他もない、ただたれもかれも懐かしくって、忍ばれて来る、

僕はその時ほど心の平穩を感ずることはない、その時ほど自由を感ずることはない、その時ほど名利競争の俗念消えてすべての物に対する同情の念の深い時はない。

僕はどうかしてこの題目で僕の思う存分に書いて見たいと思うている。僕は天下必ず同感の士あることと信ずる。

まとめ

- 言文一致
- 視点の設定
- 写生文
- 自然主義
- 近代文学の起源の生成